



平成24年2月6日

卓話 『漢字の字謎:表意的な文字遊戯』

米山奨学生

東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究修士2年

呉修喆様

漢字は日本人にとっても、中国人にとっても、もはや空気のような存在であろう。同じく漢字文化圏の国として、文化や民俗などの面において、たくさんの共通点が見られる。今は言葉が通じない国同士であるが、漢字を用いて、儒教の教えに沿ってコミュニケーションをすれば、通じる部分はまだまだ大きい。漢字は「表意文字」であり、つまり、意味を表す文字と言われる。広い国土を持つ中国にとって、漢字があるからこそ、一つの文化共同体として、国が統合されている。日本人も近年、「漢字力」をますます重視している。例えば、一年を締めくくってその年の世相を象徴する「今年の漢字」や、漢字力を検定する「漢検」、テレビでよく見られる漢字クイズの番組など、漢字ブームが起きていると言えよう。逆に漢字の母国である中国では、そのような動きが何故か見られない。しかし、漢字クイズのルーツは間違いなく中国にあり、そもそも、漢字がクイズになれるのは、その論理的な構造による。中国では古くから漢字の表意文字特質を利用して作られた文字遊びがある。それはすなわち、漢字の謎々と書いて「字謎(じめい)」である。「字謎(じめい)」とは何か、先ず例から見てみよう。

二形一体、四支八頭、四八一八、飛泉仰流。

これは六朝時代の詩人である鮑照(420頃～466)が「字謎」を題にして書いた三首の詩の内の一詩である。答えは「井」の字。前の三句は字の形を表して、最後の一句は井戸の様子を比喻している。簡単にいうと、字謎は漢字の音・形・義を材料にし、パーツや偏旁の組み合わせ、字画の増減や入れ替えなどを中心にする「なぞ」の

一種である。字謎の秀作は古代文人の逸話や各時代の稗史小説の中に多く見られる。『世説新語』に書かれている有名な謎話「黄絹幼婦、外孫贖白」はまさにそれである。その他、『太平広記』の中に記載している「李謨外孫許雲封」の七文字が隠されている李白の謎詩や、蘇軾が書いた『夜燒松明火』という詩の中に隠されている「松」の字謎など、探せば例が非常に多い。

集めた例を時代順で見ると、字謎のテクニクは以下のような発展を経過した。第一段階では漢字を全体的に観察し、文学的に表現するものが多い。鮑照の「井」の字謎がその典型である。第二段階では、偏旁や字形の細部を解体、消去、また組合せするという「離合」の手法を使うものが多い。第三段階では、形の近い漢字を聯想させ、文の中に更にトリックを仕掛けるものが多い。最初は識字階級である文人の間でしか行われていなかったが、時代につれ、市民文化の振興に伴って下流社会へと降りて、いわば一種のエリート文化が庶民文化に転じた傾向がある。この転向が唐代から始まり、明清時代に一番顕著になった。そして、一定程度の普及が終わると、字謎は再び古典文学の領域に戻り、文面を一層文学美に近づけようと磨かれはじめ、知恵の競争や娯楽のためのものから、精神的な探求を果たすものと変わりつつ、実用性だけでなく、芸術性をも追求するようになってきたと見られる。

